

五 人物埴輪腕の製作技法について

瓦塚古墳出土の人物埴輪は、腕の製作技法が中空（Ⅰ類）と中実（Ⅱ類）の二つに分かれる。両者を仔細に検討（第2表参照）すると次のような差がある。

1 中空製作のもの（Ⅰ類）は掌の表現が忠実で、その全てが粘土紐で人差指から小指までの四指を別々に製作（aタイプ）している。これに対して中実製作のもの（Ⅱ類）は掌の表現が簡略で、四指を一体に作り、線刻で指を表現するもの（bタイプ）と全く指を表現しないもの（cタイプ）とが存在する。

2 中実製作のもの（Ⅱ類）はすべて赤褐色系の色調で、焼成が良いのに対して、中空製作のもの（Ⅰ類）は色調にバラエティーがあり、乳白色や淡褐色などの白っぽいものを中心をなしており、焼成にも差がある。

3 Ⅰ類は外面調整（掌を除く腕部）にハケメを用いるか、ハケメの後にナデを加えるが、最終的にハケメの残るものが多い。これに対してⅡ類は外面調整にナデだけを用いるか、ハケメの後に強いナデを加えることによって、ハケメをきれいに擦り消している。

中空製作のものを注意して観察すると、内面の中空部分は凹凸がなく、器面に沿って擦痕、条痕をとどめるものがある。このことは棒状工具を利用して製作されたもので、粘土紐の巻上げや板状の粘土をまるめて中空に製作されたものでないことを示している。さらに、腕の付け根の屈曲部分で穴の断面が歪む場合が認められることから、棒を抜きとった後で、本体を曲げて腕の形に成形しているものと考えられる。棒を芯として使い、これに粘土で

肉づけを行って腕の祖形を作ったのか、円柱状の粘土に後から棒を差し込んで作ったかは良好な資料がなく、はっきりしない。しかし²⁵⁴に認められるように中空部分は手首まで及び、棒を抜き取った後、肩部への差し込み部分を細くするために、しばって穴をふさいでいることが観察される。この一連の技法は木芯中空技法とも呼び得るものである。

以上の事実から、棒を用いることは、体部への固定のためではなく、太い腕の部分を中空に作ることが目的であったと考えられる。²⁶²このことは認められた座像人物の足にも共通している。焼成具合を検討すると、中実のものは焼成が良好で、色調が赤色系であるが、中空のものは軟質のものを多く含むことが注目される。つまり、窯の構造や焼成技術によって腕を中空に製作せざるを得なかったのではないかと推察されるのであり、腕の製作技法の差異は、それを製作した窯、ひいては工人集団の差と考えられる。

瓦塚古墳の場合は、掌の指を粘土紐で一本一本、忠実に製作しながらも焼成技術が低いために腕を中空に作らざるを得なかった埴輪工人集団の埴輪と、焼成技術が高く、腕は中実に作るが、掌の指の表現を簡略化して作る埴輪工人集団の埴輪が同一古墳の中堤上の埴輪群の中に混在していたことになる。

腕製作技法の実例を広く西日本に求めると、五世紀中葉の大阪府羽曳野市菅田白鳥遺跡^{（註4）}と五世紀後半の大阪府高石市大園古墳^{（註5）}では中空に製作されており、さらに六世紀前葉の和歌山市井辺八幡山古墳^{（註6）}と大阪府高槻市昼神車塚古墳^{（註7）}でも中空式である。ところが、六世紀前葉と中葉の交る時期の東大阪市大賀世3号墳^{（註8）}では中空式と中実式が共存し、磐井の墓の有力候補である福岡県八女市岩戸山古墳^{（註9）}では中実式の実例が認められる。

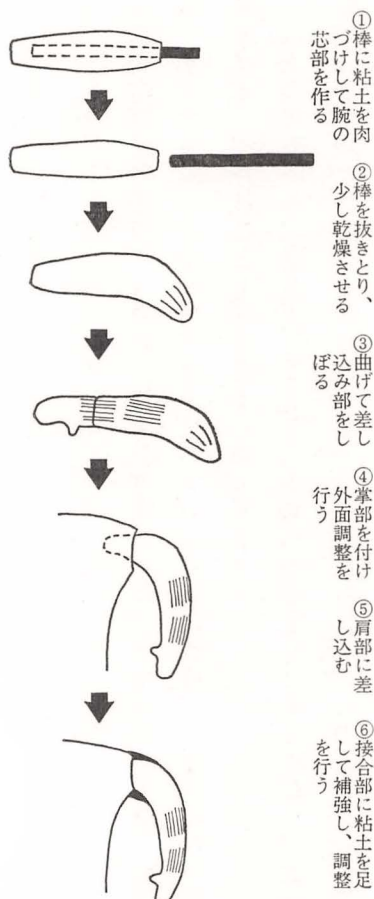
埼玉古墳群では稲荷山古墳^{（註10）}と二子山古墳では、中空式に製作されており、

東国でも五世紀末から六世紀前葉の段階ではこの技法が行われていたことが窺われる。したがって、腕の中空式製作技法は、人物埴輪の初現期から六世紀の前葉頃まで存続した技法であり、中実式の製作技法は六世紀中葉頃、新たに生まれた技法として理解することが出来る。瓦塚古墳の場合、この新旧二技法が共存したわけであり、その解釈が問題となってくる。

筆者は以前、同一古墳において、埴輪の樹立が複数回行われていることについて説いたことがある。^(註11) 瓦塚古墳にも時期を異にして埴輪の追加樹立(または補植)があったのだろうか。それとも埴輪の樹立は古墳築造の一環として一回限りであったのだろうか。後者とする、その時点では古い技術をもつ工人集団と新しい技術をもつ工人集団があつて、その双方から埴輪の供給を受けたと考えるべきなのだろうか。現時点では、その答を出すことはできないので今後の課題としておきたい。

(若松 良一)

- 註1 この例は彈琴男子胡座像(211)の掌の表現に共通する。
- 註2 この例は踊る男子(219)の掌の表現に共通する。
- 註3 第3の問題点である調整技法の差は、1類の場合、強いナデ調整を加えることが中空ゆえに控えざるを得なかったという事情によって説明が可能である。
- 註4 彌宜田佳男 「菅田白鳥遺跡」 『形象埴輪の出土状況』 九阪第17回埋蔵文化財研究会 昭和六〇年
- 註5 彌宜田佳男 「大園古墳」 出典は註4に同じ
- 註6 森 浩一 『井辺八幡山古墳』 同志社大学文学部考古学調査報告第5冊 昭和四七年
- 註7 彌宜田佳男 「昼神車塚古墳」 出典は註4に同じ
- 註8 上野利明 「大賀世3号墳」 出典は註4に同じ
- 註9 柳沢一男 「岩戸山古墳」 出典は註4に同じ
- 註10 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会 昭和五五年
- 註11 若松良一 「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析——古墳における複数回の埴輪樹立について——」 『法政考古学 第7集』 法政考古学会 昭和五七年



第47図 木芯中空技法による腕製作の工程復原図

番号	成形	四指	左右	外面調整	色調	焼成	備考	分類
233	中空	別体	左	ハケメ→ハケ	乳褐色	○	拇指直交	I a
234	中空	別体	右	ハケメ→ハケ	乳白色	×	241と対	I a
235	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡紅乳白色	×	拇指直交	I a
236	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡紅褐色	○	236と対	I a
237	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡褐色	○	握る表現	I a
240	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡褐色	○	握る表現	I a
242	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡紅乳白色	×	握る表現	I a
243	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡褐色	○	握る表現	I a
244	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡褐色	○	握る表現	I a
250	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡紅乳白色	×	握る表現	I a
251	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡褐色	○	握る表現	I a
254	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	茶褐色	○	握る表現	I a
255	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
257	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
260	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
258	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
238	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
239	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
245	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
246	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
247	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
248	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
252	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
253	中空	別体	右	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a
249	中空	別体	左	ハケメ→ナデ	淡赤褐色	○	握る表現	I a

第2表 人物埴輪腕部の形式分類表(焼成:◎:良好、○:普通、×:不良)